

in play の哲学 その3 前衛のお仕事

ダブルス、雁行陣。前衛の仕事はポーチ。しかし、それは相手の後衛が打ったボールを叩き落として得点することか、と言え、それはほとんどそうでもない。今回の GantoTennis のテーマは、「前衛のお仕事」に対する意識を変えることである。

さて、相手の後衛の目には、前衛であるお前の姿がどんなふうに見えるだろうか？それは、取りも直さず「自分が打ったボールを叩き落として得点しようとラケットを構えているヤツ」である。ある意味、前衛はこれですべての仕事をやり尽くしたとも言える。

しかし、もう一度尋ねよう。相手の後衛の目には、前衛であるお前の姿がどんなふうに見えるだろうか？もしかすると、さっきのは思い過ごしで、実は「ネットの近くで自分の方を向いてラケットを構えて立っただけのヤツ」かもしれない。

「自分が打ったボールを叩き落として得点しようとラケットを構えているヤツ」と「ネットの近くで自分の方を向いてラケットを構えて立っただけのヤツ」、見た目はあんまり変わらないが、これからボールを打とうとしている相手の後衛にとっては大違いである。

「ネットの近くで自分の方を向いてラケットを構えて立っただけのヤツ」なら、相手の後衛はほとんど無心でボールを打ち返すことができる。極端な話、センターマークのあたりに落ちるようなボールだって打てるのだ。だって、前衛は「立っただけ」で、ポーチの心配なんか全然いらぬのだから。さて、そのボールが実際にセンターマークのあたりに落ちるようなボールだったとして、今度はそれを打ち返す番の、お前のペアである後衛は、センターマークの真後ろでラケットを振らなくちゃならない……この状況でのセンターセオリーはもう説明不要だと思う。そんなところから打ち返すのでは、ロブにでもしない限り、相手の前衛のポーチの餌食である。

でも「自分が打ったボールを叩き落として得点しようとラケットを構えているヤツ」がいるのなら話は全く違ってくる。だって相手の後衛は、自分の打ったボールが前衛であるお前にポーチされることを心配しながら（邪念にとらわれながら）ラケットを振らなければならないのだから。当然、ミスも増える。ポーチされることを避け、厳しいボールをサイドライン一杯に打ち返したとして、今度はそれを打ち返す番の、お前のペアである後衛は、サイドライン一杯から、広い角度で打ち返すことが出来る。ストレートにも攻めやすい。ポーチの心配（邪念）にとらわれることもないから、ミスも減る……“いいことづくめ”である。

「前衛のお仕事」はポーチ。しかしそれは、ボレーで得点することではない。「ポーチするぞ！」とラケットを構えることで、相手後衛に心理的プレッシャー（邪念）を与えて、無心の自由なストロークをさせないことである。だから、優秀な前衛の最高の勲章は、相手の後衛がポーチを恐れて苦し紛れに打ったストレートのミスショットである。